平成 28 年度　第 2 回
北海道立総合博物館協議会

議 事 録

日時：平成 29 年 3 月 30 日（木）　13 時 30 分開会

場所：北海道庁別館庁舎 9 階　第 1 研修室

平成 28 年度　第 2 回北海道立総合博物館協議会議事録

会議名	平成２８年度　第２回北海道立総合博物館協議会
開催日時	平成２９年３月３０日（木）１３時３０分～１５時３０分
開催場所	北海道庁別館庁舎 9 階　第 1 研修室
出席委員数	６名出席（欠席１名）
傍聴者	０名

※・単なる相づち及び言い直しなどは、原則として割愛する。

・内容に応じて≪意見・提案≫、≪質疑応答≫等の見出しを便宜的に作成した。

目　次

１　開会 1

≪副館長あいさつ≫ 1

≪資料確認≫ 1

≪出席状況確認≫ 1

≪会長あいさつ≫ 2

２　議題

議題（１）報告事項１　平成２８年度事業実績について 3

議題（２）報告事項２　平成２９年度事業計画について 3

≪質疑応答１　Twitter の反応について≫ 3

≪質疑応答２　「社会貢献」件数の内訳について（1）≫ 4

≪質疑応答３　道民参加型組織の整備に向けた平成 28 年度の実績と今後の計画≫ 4

≪質疑応答４　道民参加型組織の整備に向けたスケジュールについて≫ 5

≪質疑応答５　「社会貢献」件数の内訳について（2）≫ 5

≪質疑応答６　「社会貢献」件数の内訳について（3）≫ 6

≪質疑応答７　「社会貢献」件数の内訳について（4）≫ 6

≪質疑応答８　赤れんがサテライトについて（1）≫ 6

≪質疑応答９　赤れんがサテライトについて（2）≫ 7

≪質疑応答１０　道民参加型組織の整備計画について（第 1 期）≫ 8

≪質疑応答１１　道民参加型組織の整備計画について（第 2 期）≫ 8

≪質疑応答１２　道民参加型組織の見通しについて≫ 9

≪意見・提案１　道民参加型組織の見通しと事業全体とのバランスについて≫ 9

≪質疑応答１３　カフェについて≫ 10

≪意見・提案２　指定管理者制度について≫ 11

≪質疑応答１４　数値目標の立て方とアンケートについて≫ 11

≪意見・提案３　アンケートについて≫ 12

≪意見・提案４　ミュージアムパートナーについて≫ 13
≪意見・提案５　事業全体のバランスについて≫ 14
≪質疑応答１５　開拓の村と内部評価との関わりについて≫ 14
≪意見・提案６　開拓の村に関する資料について≫ 15
≪質疑応答１６　「研究成果発信」について≫ 16
≪質疑応答１７　ＪＲバスの英語表記案内について≫ 16
≪意見・提案７　道民参加型組織について≫ 17
≪意見・提案８　「ミュージアムエデュケーターの機能の強化」について≫ 17
≪意見・提案９　「ICT ワーキングチーム」について≫ 17
≪意見・提案１０　数値目標について≫ 18
≪意見・提案１１　マスコミに対する広報について≫ 18
議題（３）　今後のスケジュールについて 18
３　閉会 19

１　開会

右代学芸主幹：それでは定刻より若干早いですが、各委員の方がお集まりになりましたので、第 2 回の北海道立総合博物館協議会を開催します。本日の会議の司会については、私が務めますので、よろしくどうぞお願いします。

本日は、館長の石森が、急用ができて、欠席せざるを得ない状況になっております。開会にあたりましては、北海道博物館副館長・吉田よりご挨拶させていただきます。それでは、よろしくお願いします。

≪副館長あいさつ≫

吉田副館長：司会からもありましたとおり、今日、急遽、館長の石森が欠席をさせていただきますことを、まずお詫び申しあげます。代わりまして、私のほうからひとこと、ご挨拶をさせていただきます。

本日は、年度末の大変お忙しいなか、北海道立博物館協議会にご出席を賜りまして、誠にありがとうございます。早いもので、北海道博物館ももう２年目を終えようとしております。今年度につきましては、昨日（3 月 29 日）までの入館者数が 108,017 人となりまして、2 年続けて 10 万人を達成することができました。特に、昨年開催しました、特別展の「ジオパーク展」には、6 万人近い方々が来館されまして、子供連れのファミリー層にも大変好評いただいたところでございます。また、先月には、冬季アジア札幌大会の開会式にご臨席するためにご来道されておりました皇太子殿下に当館をご視察いただくという、誠に光栄なできごともございました。こうして、多くの皆様にご来館いただくことで、私どもの館員としてのモチベーションも非常に高まります一方で、展示に対する責任の重さなども改めて感じているところでございます。今後も委員の皆様のご指導・ご助言をいただき、よりよい博物館としていきたいとの思いを一層深めていきたいと思います。

本日は、当館の運営状況、あるいは来年度の計画などにつきまして、ご説明をさせていただき、皆様からご意見を賜りたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

簡単ではございますが、開会にあたっての挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

≪資料確認≫

右代学芸主幹：それでは、配布資料を確認したいと思います。

〈以下、式次第、資料１「平成 28 年度北海道博物館事業実績報告」、資料２「平成 29 年度北海道博物館年度計画」、資料３「展示会ならびにクローズアップ展示の更新計画」、資料４「外部評価のスケジュール」について確認〉

≪出席状況確認≫

右代学芸主幹：今回は、加藤副会長が欠席で、委員総数 7 名のうち 6 名が出席されており

ます。北海道立総合博物館条例（第）25 条第 2 項の規定で、委員総数 2 分の 1 以上が参加しており、委員会は成立していることをご報告いたします。

本日の会議は、本年度の第 2 回の協議会となっておりますので、今回出席している皆さんの紹介は省略させていただきます。

この協議会は、道の公開条例の規定により、公開の取り扱いとなっております。現在、傍聴者はいらっしゃいませんが、公開ということでご了解いただければと思います。

それでは早速、本日の会議に移っていきます。議事進行を佐々木会長にお願いして進めていただきますので、よろしくどうぞお願いいたします。

≪会長あいさつ≫

佐々木会長：佐々木です。皆様、こんにちは。座ったままで失礼いたします。開会にあたりまして、一言ご挨拶申しあげます。今日は年度末で、皆様、相当お忙しいなか、また雨で寒いなか、ご都合繰り合わせて、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

先ほど、副館長からもご挨拶がありましたように、1 年目はもちろん、いろんな意味で成功したものがあって、2 年目も引き続き、特別展・常設展示や企画展など非常に順調にいっている部分が多いかと思います。また、今回、事前に内部評価の報告書をいただいて、その中でもまだまだ改善する余地があるもの、これから頑張らなければいけないものも、いろいろ顕著になってきたと思います。

今日の配布資料の資料 4 にあるように、これは、全体の外部評価の中の、2 年目の内部評価報告をうかがって、こちらから意見を申しあげるという位置づけです。来年度になると、今度は中間的な外部評価をする年度に入っていきますので、そのひとつ手前の年度だということも、委員の皆様、心の隅に置いていただいて、これからご報告いただく事業実績報告もしくは来年度の年度計画について、委員の皆様方の忌憚のないご意見をいただければと思いますので、よろしくお願いします。

最後に、議事の円滑な進行についてのご協力をお願い申しあげまして、私のご挨拶とします。

２　議題

佐々木会長：本日の議題は、お手元の次第にありますように、平成 28 年度北海道博物館事業実績報告と平成 29 年度北海道博物館年度計画の報告です。

終了時間は、おおむね 15 時 30 分を予定しておりますので、よろしくお願いします。では早速議事に移ります。

まず、報告事項 1「平成 28 年度北海道博物館事業実績報告」と、報告事項 2「平成 29 年度北海道博物館年度計画報告」です。一括して事務局からご説明いただきます。質疑はその後に、まとめて行いますので、お願いいたします。

議題（１）報告事項１　平成２８年度事業実績について
議題（２）報告事項２　平成２９年度事業計画について
右代学芸主幹：それでは、資料１「平成 28 年度北海道博物館事業実績報告」に沿って進めさせていただきます。
〈以下、資料１に基づいて、平成２８年度事業実績を報告〉

佐々木会長：今、資料１のご説明がありました。引き続いて、来年度の計画についての報告も、事務局の方からお願いします。

右代学芸主幹：「平成 29 年度北海道博物館年度計画」に沿って進めさせていただきます。平成 29 年度計画につきましては、舟山学芸部長より報告させていただきます。なお、ガバナンス体制の育成については、北総務部長より説明があります。アイヌ民族文化研究センター事業計画につきましては、小川アイヌ民族文化研究センター長より報告させていただきます。それでは、舟山部長、よろしくお願いいたします。
舟山学芸部長：私のほうからは、（平成）29 年度北海道博物館年度計画についてご報告させていただきます。
〈以下、資料２に基づいて、平成 29 年度北海道博物館事業計画を説明〉

右代学芸主幹：ガバナンス体制の育成について、北部長からお願いします。
北総務部長：引き続き、資料２の計画の９ページ目の説明をさせていただきます。
〈以下、資料２に基づいて、ガバナンス体制の育成についての平成２９年度計画を説明〉

右代学芸主幹：小川センター長、お願いします。
小川センター長：アイヌ民族文化研究センターの小川と申します。
〈以下、資料２に基づいて、平成２９年度アイヌ民族文化研究センター事業計画を説明〉

佐々木会長：ただいま、資料１と資料２についてご説明いただきました。これから委員の皆様からのご意見とか質問の時間になりますけれども、まず専ら資料１に属する質問やご意見から行いたいと思います。もちろん、資料 1 の中には来年度の計画も入っていますけれども、とりあえず、実績報告・内部評価についての方から、委員の方のご意見や質問など、うかがっていきたいと思います。どの項目からでも結構ですので、ご自由にお願いします。

≪質疑応答１　Twitter の反応について≫
竹垣委員：まず訊きたいのが、（資料１の 13 ページの）総括評価の 6 番。これはたぶん、（項目別番号の）20 番で、（資料１の）45 ページに反映していると思うのですが、今、基本的には博物館で Twitter を使われているのですね、情報発信として。レスポンスはどれく

らいあるのかというのがひとつ。何をもってこの項目を評価しようとしているのかということですよね。

舟山学芸部長：（Twitter の）レスポンスですけれども、残念ながら、3 桁には届かない状況です。平均すると 2 桁です。

竹垣委員：2 桁の前半ですか、後半ですか？

舟山学芸部長：十数件です。

竹垣委員：少し厳しいですね。

佐々木会長：はい、ありがとうございました。

≪質疑応答２　「社会貢献」件数の内訳について（1）≫

竹垣委員：ふたつめが、社会貢献。資料 1 の 50 ページ。「社会貢献」の平成 28 年度実績は 600 件になっていますけれども、具体的に、たとえば新聞でのニュースリリースのような、実になるようなものは何件ぐらいあったのかというのと、学会発表の件数 30 件が、そもそも研究発表できる人が何人いて、その中で何人が発表されて、結果 30 件になっているのか。

佐々木会長：資料 1 の 50 ページにある、今年度の実績の 600 件の、特に学会発表だったら、どのくらいの人がそれの有資格者であり、平均どのぐらい出ているのか、ということですね。

舟山学芸部長：学芸員・研究職員 30 人、全員、発表する資格はあります。何らかの学会に参加しておりますので。

佐々木会長：では、平均 1 人 1 本ですか？　そういうことですね？　30 人（ですから）。

舟山学芸部長：数字上はそうです。個人差はありますが。

佐々木会長：もちろん、個人差はあるのですね。

竹垣委員：まったく出していない人は、何人くらいいらっしゃるのですか？　１年活動して、１本も論文書かれてない方って、何人くらいいらっしゃるのですか？

舟山学芸部長：論文という形だけではなく、展示会ですとか、学会発表ですとか、私ども研究紀要に関わりますけれども、何かには関わって発表していると言えます。

小川センター長：この事業実績をまとめるときに、すべての職員に対して、1 年間に行った学会発表、取材対応、その他のいわゆる調査研究に関わる業績を集約しました。1 件か 2 件しかない職員もいれば、10 件ぐらい出てくる職員もいますけれども、1 件もない職員はさすがにゼロです。

≪質疑応答３　道民参加型組織の整備に向けた平成 28 年度の実績と今後の計画≫

竹垣委員：道民参加型組織の今までの実績、去年何をやったかと、今年何をやろうとされているのかをうかがいたいです。

佐々木会長：道民参加型組織の整備として、今年度何をやって、来年度はどういうことを目指すのかという説明ですね。

右代学芸主幹：資料をお配りいたします。〈資料を配付する〉
　道民参加型の組織は、今年度、内容について計画をして、将来的な計画も含めて整備してきたところでございます。
〈以下、配布資料に基づいて、事業期別道民参加型組織整備計画について説明〉

佐々木会長：ありがとうございます。質問がもうひとつありましたね。道民参加型組織に向けて、今年度どんな検討をしたかというのが、竹垣委員の質問だったのですが。平成 28 年度は、これのための計画づくりだけだったという理解でいいですか？
右代学芸主幹：計画づくり。計画と実施に向けた、様々な検討を行って、この春から進めていくものです。
佐々木会長：その検討というのは、このような形でやっているところに視察に行ったりとかヒアリングに行ったりということも含んでということですか？
右代学芸主幹：含んでいます。
佐々木会長：どういうところに行かれたのでしょうか？
右代学芸主幹：三重のミュージアムとか大阪の博物館とか、そこのボランティアのいろんな博物館のグループがあって、毎年、大会があったりとか、そういうところに参加しながら、情報を収集しながら、こういう計画を立てております。
佐々木会長：今、ご説明ありましたことについて、どうでしょうか、委員の皆様は？

≪質疑応答４　道民参加型組織の整備に向けたスケジュールについて≫
宇佐美委員：もう少し（道民参加型組織の整備に向けた）計画はスピードアップできないでしょうか。だいぶ前から、この博物館協議会の前の段階から、「ぜひこういう組織が必要だ」という議論をしてきたと思うのです。皆さん、忙しいでしょうけれど、せっかく北海道博物館に関心をもって、たくさんの人たちが来るようになった時期ですので、この時期にあわせて、もう少しスピードアップしてやっていただけたらありがたいなと思います。
右代学芸主幹：平成 29 年度からスピードアップしながら、資料に沿った、組織づくりを進めてまいりたいと思っています。
佐々木会長：先ほどの、ヒアリングに行ったという館では、こんな時間の切り方ではないと思います。立ち上げから、ある程度成熟するまで、もう少し短いのではないでしょうか。
右代学芸主幹：当初は確かに短く考えていたわけですが、方法として、「友の会」という組織を設立させてから、事業を展開していくというトップダウン方式もあったのですが、それをやめて、基盤から作っていこうと考えております。

≪質疑応答５　「社会貢献」件数の内訳について（2）≫
竹垣委員：（資料 1、50 ページ「社会貢献」における）新聞等の対応について、パッシブなのかポジティブなのかという意味で、先ほどは訊きたかったのですが、要はこちらからニュ

ースリリースで投げ込んだのは何件ぐらいありましたか？　マスコミへの投げ込みと限定してもいいのですけれど、何件ぐらいありましたか？

小川センター長：件数はすぐには答えにくいのですが、基本的に、先ほども申しあげました企画テーマ展などの事業があるごとに、必ずそこに関わる投げ込みを、こちらで行っています。それは単に「開催します」だけではなくて、「こういった専門的な中身を持っています」ということを伝えて、それを踏まえて「取材してほしい」とか、あるいは「連載記事を書きます」ということとセットでお願いをしています。それ以外に、新しい学術的な発見があったときにはリリースしているので、合計するとだいたい、資料 1 の 600 件という数が、こちらから積極的に発信している件数になるかと思います。

≪質疑応答６　「社会貢献」件数の内訳について（3）≫

竹垣委員：たとえば、Twitter へのフォロワーになるというのが、興味を持っていることの答えになってくると思うのですが、それが十数件では、やはりまずいのではないでしょうか。

舟山学芸部長：フォロワー数は、4 桁？

小川センター長：1500 ぐらいです。

竹垣委員：官公庁は、みんなそうですけれど、フォロワー数が、最初、ポンと多く出るのですけれど、あとが続かなくてレスポンスが 10 件、20 件ぐらいになっちゃう。

小川センター長：フォロワー数は、こちらも気にして見ています。最初、1000 ぐらいまではポーンと増えて、その後も、今のところはじりじり増えてはいますので、頭打ちというところまでは、まだ来ていないと見ています。

竹垣委員：担い手をつくらないといけないですね。

≪質疑応答７　「社会貢献」件数の内訳について（4）≫

竹垣委員：先ほどの論文数などは、全体の件数とは別に管理する手法は、あるという理解で良いのですか？

小川センター長：そうです。業績は、先ほど申しあげた方法で集計を行っています。

≪質疑応答８　赤れんがサテライトについて（1）≫

宇佐美委員：赤れんがサテライトですけれども、今年度少し整備されたと報告がありました。この協議会の前に、少しだけ覗いてきたのですが、どういうふうに整備しなおしたのかを、もう一度改めて説明していただきたいです。たぶんサテライトの役割は、「北海道博物館は遠いし、行ったことがないけれど、どんなところか」が「入り口程度でも糸口になったら」と思う人が眺めたら「ああ、北海道博物館とは、こういうところなのか」とわかることだろうと思います。そういう意味では、前より少し整備されたようにも思います。けれども、たとえばアイヌ（文化）関係のものがないのですが、せっかくアイヌ民族文化研究センターと一緒になった北海道博物館という位置づけであれば、もう少しアイヌ文化関係のものがあ

ればと思います。スペースが狭いから、制約はあるでしょうけれども、「どうしてないのかな」とも思いましたので、どのように整備されたのかをまずうかがいたいのと、来年度に向けては、どのようにまた整備し直すのか。予算や、いろいろな制約もあり、それこそボランティアのおひとりでもあそこにいれば、もっと説明してもらえていいのにと思いました。そういうことも含めて、新年度以降、考えてらっしゃることがあれば教えていただきたい。

舟山学芸部長：赤れんがサテライトにおきましては、北海道博物館への誘客という考え方のもと、展示改定を進めてまいりました。しかし、（赤れんがには）外国人のお客様が多いことから、直接誘客に結びついているかという点については、調査が必要でした。その調査を含めて、大きく対応したことは、まず情報発信機能の強化です。これは北海道内の博物館の紹介パンフレットを置いていたのですが、供給が進まなくて、あまり動いていなかった状況がありました。それをわかりやすく整理することと、海外からのお客様への対応として、多言語にするなどの改善をしております。内容につきましては、プロモーションビデオなどで映像の活用ですとか、実物資料については、保存環境があまりよくないものですから、室内環境の影響を受けやすいものは、一度、大きく展示から外しましたが、影響を受けにくい実物資料を今回、改めて展示したところです。

宇佐美委員：アイヌの資料については、どうですか？

舟山学芸部長：（赤れんがサテライトの）資料的な環境が良くないのです。湿度や光の関係です。そういう展示環境の影響を受けやすいものは、今回、展示をしませんでした。ただ、パネルで２テーマを紹介しております。

宇佐美委員：パネルはありましたか？

舟山学芸部長：基本的には、『ビジュアル北海道博物館』の中テーマ解説を用いて、新しく、一律の展示パネルに更新しております。

宇佐美委員：外国の方がたくさんいらっしゃるのに、それ（パネル）だけだと寂しいですね。せっかくいらっしゃるのに、という感じはします。あれだけの（狭い）スペースだからしょうがないとは思いますが。

≪質疑応答９　赤れんがサテライトについて（2）≫

宇佐美委員：赤れんが庁舎全体に関わることですが、道庁として、赤れんが全体の見直しをされる計画もあるやに聞いているので、その辺とのかかわりについても教えていただきたいです。私は、個人的にあそこは、もっと「第２博物館」というか、もっと博物館がスペースをたくさん使ったら良いと常々思っています。これは道庁との関係、道の考え方にもよるでしょうから、そういった点についても教えていただきたいです。

舟山学芸部長：赤れんが庁舎の新しい使い方につきましては、本庁総務部で現在、検討しているところですが、当面の間は、北海道博物館のサテライトとして利活用を続ける予定となっております。

佐々木会長：ありがとうございます。他に、いかがでしょうか。

≪質疑応答１０　道民参加型組織の整備計画について（第１期）≫

竹垣委員：道民参加型組織についての資料に、「第１期」と書いてありますが、具体的には、たとえば平岸歴史クラブみたいなところに誰かが名刺もって訪れて、「どうですか、うちのミュージアムパートナーなりませんか？」「ミュージアムパートナーと一緒に勉強しませんか？」と、そういう説明に行くのですか？

右代学芸主幹：そういう形で公募して、たとえば古文書を学ぶサークルに参加したい人、たとえば考古学をやりたい、アイヌ語について学びたいという人に対して、そのためのサークルをこちらで用意して、それに対して参加していただく形を考えています。たとえばその企画の中で、考古学であれば、どういう縄文の遺跡を訪ねていきたいかというような形でバス見学会を企画してもらい、それに我々が加わって説明に行ったりとか、そういう情報なり、知的財産を共有することによって、様々な展開ができるだろうと考えています。

竹垣委員：それを２年間で、どれぐらいのサークル数を組織化しようとされたのですか？２年間で、誰が責任もって、いくつぐらいのサークルを組織化すれば、この（道民参加型組織の）母体となるに事足れりと思っていらっしゃるのですか？

右代学芸主幹：企画グループが中心になって、責任をもって、各研究グループが実施可能なサークルを設定して、その各グループの学芸員が主体的にサークル活動を始める計画です。

竹垣委員：私が訊いているのは定量目標です。

右代学芸主幹：定量目標については、そこまではまだ進んでいません。

竹垣委員：そういうのがないと、仕事が進まないのではないですか？　最終的には、第４期まで計画があるわけですよね？　その時に、たとえば１万人なのか、5000 人なのか。私が Twitter のレスポンスが十数件では問題だと言ったのは、こういう目標をカッチリ定めないと形になってこないと思ったからです。定量目標も作らないでいると、「組織を作ったよ」、で、「フォロワーさんが２人ですよ」ということになったら、結局 Twitter と同じで、自己満足になってしまいませんか、ということを言っているのです。

右代学芸主幹：定量目標は、まだ検討してない段階です。

竹垣委員：そういうことをしないと、８年経って、やっとここまでということになっていかないと思います。

佐々木会長：ぜひそこは、館内で検討していただきたいと思います。この「公募開始」は（平成 29 年）４月の頭からもう始めるということでよろしいですか？

右代学芸主幹：そうです。４月の頭に公募をしはじめます。

≪質疑応答１１　道民参加型組織の整備計画について（第２期）≫

竹垣委員：たとえば、ミュージアムエージェントを第２期でつくるのは、学芸員を目指すぐらいのレベルの人をつくるということですか？

右代学芸主幹：そうです。

竹垣委員：それは、いいことだと思います。
右代学芸主幹：サークル活動をしながら、たとえば古文書に関してかなりプロフェッショナルに近づいた人については、また違う事業の展開につなげていく考え方です。
竹垣委員：そこまでの展望をお持ちだったら、トップダウンできちっと示したほうがいいような気がしますけれども。「こんな素晴らしい企画持っています」と。

≪質疑応答１２　道民参加型組織の見通しについて≫
宇佐美委員：旧開拓記念館時代に、「友の会」がありましたよね？　でも全然（会員が）少ないし、うまく回っていかないという話を、以前に聞いたと思うのですけれど、そことの運営の仕方の画期的な違いというか、公募すればかなり集まるだろうという見通しは、あるのですか？
右代学芸主幹：それは具体的にやってみないとわからないところがありますが、古文書講座とか考古学の講座では、かなりの興味を持たれている方がいますので、そういう人たちが、たとえば 20 人、30 人が核になってサークルを始めるなかで、このミュージアムパートナー的な事業ができると考えています。竹垣委員からご指摘のあった、定量的にどのように、1サークル何人ぐらいで、いくつのサークルを作るのか、さらにそのなかでエージェントが何名ぐらい育っていくのかとか、その次の段階で「友の会」をどのように考えていくかということですが、「友の会」規模になると、やはり１万人、２万人規模のものを目指さなければならないという意識はありますが、まず活動をしてくれる道民の方がどれだけいるかを押さえたいというのが、そもそも大きな今回の動きです。ですから、私も竹垣委員と同じで、トップダウン的に「友の会」を作って、その活動としてサークルなり何なりを作って運営をしていったほうが、すごくスピード的にはそれが早いのです。ただそれが本当に当館の今の組織のなかで対応できるかどうかという問題も含めて検討した結果、基礎固めをしていきましょうという方向になりました。
竹垣委員：やっぱり、基礎固めから入っていくのと、行き当たりばったりというのは、峻別しないといけないと思うのですよ。ですから、基礎からやっていくのは、いいと思うのですけれども、やっぱり第 4 期のイメージは、少なくとも博物館で持たれてやっていかないと、結果的に似ても似つかないものができたということになりかねないという気はします。

≪意見・提案１　道民参加型組織の見通しと事業全体とのバランスについて≫
大原委員：実務的に今、博物館のキャパシティとしてできるかどうかというお話もありましたけど、学芸員の方たちがサークルを持って大丈夫なのでしょうか？　実際、私も博物館に長くいて経験したのは、要するに「ボランティアをお願いします」とやっていると、学芸員がいてもいなくても働いてくれてる状態ができると思うのです。けれど、普通の時も普及講座をやっているわけで、（さらに）サークルとなると、それとはまた別に、特定の人間とかなり長い間、きちっと付き合うという、すごく大変な仕事になると思うのです。たとえば、

大阪の自然史（博物館）は、昆虫同好会がちゃんとあって、その事務所が自然史博物館に入って、結果的にNP(O)になっていたり、研究サークルになっています。これを、たとえば今から「昆虫やりたい人、集まってください」と言ったときに、小学生が集まって、３年後にみんな中学生になって虫に興味がなくなるというのは、たぶん、みんな、博物館が経験してきたことだと思います。これ（整備計画）は、絵としてはすごく素晴らしいと思うのですが、このサークルを動かすのはとても大変だと思います。そうでなくても皆さん、今お忙しい状況だと思います。ですから、むしろ「これをやるから、この事業を減らした」ということをやらないと、バランスがおかしくなると思います。

佐々木会長：そうですね。大原先生のご経験からの意見だと思います。これは、4 月から実行に移すということですけれども、よりスピード感のある形で、そして定量的な目標を持ちつつ、今の大原先生のお話だと、本当に今のキャパシティで実現できるのか、そのためには何かを削らなければいけないのか。当然、人間の数は決まってるわけですから。そういう兼ね合いを見たうえで、何が実行可能なプラン・進め方なのかを、やはりもう一度精査していただたいほうがいいのではないかと思いました。

　それでは、他の点でいかがでしょうか。

≪質疑応答１３　カフェについて≫

大原委員：資料 1、10 ページの目標値番号 12 番で、「アメニティ設備の整備」と「オリジナリティグッズの販売」とありますが、たとえばこれ、今、カフェがありますよね？　ああいったカフェは、どういうふうに評価されていますか？　この内部評価だと「B」で評価されていますが、どういう理由で、この評価になったのか、去年、カフェが実際うまくいっていたのかどうか、来年度はカフェをどうしようと考えているのですか？

右代学芸主幹：カフェは、やはりたくさん人の来るときは非常に混雑して、非常に大変なところもあるかと思うのですが、来ないときは本当に少ない。立地条件もあるのですが、トータル、1 年では、ある程度運営が成り立ってるというのは、指定管理者から報告は聞いています。ただし、指定管理者と博物館とどういうふうにグッズを開発していくかというのは、今後の大きな課題でもありまして、それと、販売するような組織というのは、まだまだ弱いところですので、今後どうするかは大きな課題です。ただ、実際に道が直営でやってるわけではないので、どういうように俯瞰していくかというのが、今後の大きな課題です。

佐々木会長：大原先生のご質問は、カフェがどのような位置づけで B 評価になっているのか、もしくは関与していないのかをお聞きしたいのではないですか？

右代学芸主幹：いや、B のなかでは潤沢に来ています。

大原委員：評価 B ですよね？　評価 B ということは、評価の基準は「90%が達成できなかった」でしたか？

佐々木会長：B は「90%未満の達成」。ただ 90%未満だと、1 から 89 まで入るので、1 から 89 まで、かなり幅はありますが。

大原委員：だいたい、いい感じだということですか。
右代学芸主幹：いい感じだったということです。
佐々木会長：ただ、カフェの記述は、この達成状況の中のどこにありますか？
北総務部長：お答えいたします。資料１の 35 ページをご覧いただきたいのですが、真ん中のところに、平成 28 年度の実施状況がございます。たとえば、ここにグランドホール内に鍵付き傘立ての設置、ベビーカーの増設、オリジナルグッズの開発・販売という達成状況を記しております。これらをトータルで評価しての B なのです。なぜ B にしたかと申しますと、（平成）28 年度の計画の中で「記念ホールの活用の一層の推進のため、博物館の施設の活用基準の検討・策定を行う」ことになっていたのですが、これが遅れていて、行っていないので、B 評価でございます。取り立てて、カフェが云々という部分について評価しているわけではございません。また、当初、開拓の村、それからふれあい交流館の管理・運営については、指定管理制度が導入されていることから、本協議会で対象とすることは、当該施設管理制度の導入の趣旨から適切でないと理解しております。仮にこの場で、これらの業務実績についてご意見があった場合には、指定管理者に、意見を述べるに留めると認識しております。本件については、指定管理者に伝えておきたいと思います。
佐々木会長：ありがとうございます。

≪意見・提案２　指定管理者制度について≫
大原委員：指定管理者制度が導入されてから 10 年以上経ってると思うのですが、この間、研究会がありまして、結局指定管理をやったところとやらなかったところで、やったほうがよかったというところが博物館的には多かったみたいです。なので、だいぶ昔は指定管理にすると予算が少なくて安く済むという判断だったのですが、どうも予算を投入しても指定管理にしたほうが、結果的に博物館が良くなるという結果が出たということを聞きました。一番ひどいのは、指定管理者にも出せないぐらい状況が悪いところが一番悪い博物館だということでした。ですから、博物館（にとって）、指定管理をきちんと見ることは、とても大切なことだと思います。

≪質疑応答１４　数値目標の立て方とアンケートについて≫
佐々木会長：ありがとうございます。他の観点、他の項目でいかがでしょうか。
本田委員：前回の集まりのときに、この数値とか目標を、アウトプットとアウトカムとで、ちゃんと考えてほしいと発言しました。単に数値目標だけだと、一体その目標が、自分たちがやろうとしていることのなかで、どういう意味を持つのか、よくわからなくなるので、その２つの目標から、必ず数値とか実際の実施方法を考えようと、私は最近、思っています。今回、どういう形で実績を出してくださるかなと思っていたのですが、前回とあんまり変わっていないかもしれないと思いました。
　たとえば先ほどの報告では、資料 2 の 6 ページの（来館者アンケートの）満足度の目標

値が、（今年度は）94.8%の実績があったけれども、「（次年度の目標は）とりあえず前年と同じ 80%に抑えました。どうしてかというと、このアンケートの取り方自体をもう一度精査する」というふうに仰っていて、それは素晴らしいなと思いました。けれども、アウトプットのほうは数字で出てきて、アウトカムのほうがパーセンテージで出てくることが結構ありますので、満足度をどのようにアウトカムという視点で出してくるのか、どのように新しい形に変えようされているのか、どういうアンケートを取ろうとしているのか、とても関心があるところなので、それを教えていただきたいです。

佐々木会長：（展示のアンケートについて）どのような仕組みで、そのアウトカムを図っているのですか、ということですね。

本田委員：そうです。

舟山学芸部長：現状で言いますと、企画展を開催するごとに、総合展示と企画展の内容について、5 段階評価でアンケートを出口で書いていただいております。特別展のときには、たくさんのご意見をいただきますが、そういうときには回答数の数値が高いと満足度も若干低くなってくるという状況が見えます。その 5 段階評価でいいのかどうか含めて、具体的にお客様の満足度を図るにはどういう方法がいいのか、これまで広報と公聴を別々に見ていたところを、お客さんの声をそのまま展示会の内容の質を高める方向に行って、それを広報していく方向にしてまいりたいと考えています。内容については、まだ検討しているところですけども。関連付けてご報告させていただきますと、今年の研究紀要に、オーディエンスリサーチの結果の報告をさせていただいています。これは博物館実習生と連携いたしまして、実際に総合展示場内でお客様の声を直に聞くという方法を取って、総合展示場のお客様の（観覧）状況について調査したものです。

佐々木会長：満足度はそういうふうに 5 段階で計るというのは一般的かもしれないですけれども、今の本田先生のご質問は、アウトカム、つまり展示をやったことで、お客さんに対してこちらが本当に期待しなければならない成果というのは、満足だけではなくて、たとえばアイヌ展示を見ることで、「アイヌに対する見方が今までとは変わりました」とか「アイヌの本を読んでみようと思いました」という、要するに、その先にあるアクションなわけですよね？　そういうものまでも視野に入れていますか、というご質問だと思いますが。

舟山学芸部長：当然、5 段階の評価という形だけではなくて、お客様がどう博物館を利用しているかのリサーチを行い、それを次の活用につなげるためのものを実施することができるよう引き続き検討していきたいと考えています。

≪意見・提案３　アンケートについて≫

佐々木会長：オーディエンスリサーチの報告を、私も今、ぱっと見ましたけれど、これは、ニーズを調べているというよりは、今どうだったかということ――何分入って、どんな属性で、ということなので、この設計の趣旨が、オーディエンスリサーチの本来のものと違うかなという気がしました。それから、本田先生の質問に私からの意見をひとつ申しあげたいの

ですが、資料１の 25 ページで、企画展示に関する S 評価というのは、まったくそのとおりだと思いますが、ただ片や、特に展示とかコレクションに関することは、専門家のコメントこそ、実はすごく意味のある場合がありますよね？　「こういうラインナップで他県でもやっていて、それをまた意味を変えて、違う挑戦的な展示をした」というのは、たぶんお客様にはなかなかわからなくて、専門家でしかわからないものがありますので、今、本田先生が仰った、満足度だけかというのは、本来であれば、専門家のコメントも付加されるようなこともきっとご期待になっていたのかなと思いました。この S 評価にはまったく異論はありませんが、企画テーマ展の「アイヌ民族資料を守り伝える力」の満足度は 94.9%で非常に高いですし、無料でやっているので、このぐらいになるのは当たり前だと思うのですけれども、たまたま私、この展覧会のときに、大学の学生・院生、10 人か 15 人ぐらいで、各自バラバラで見学させて、ゼミの演習として展示の批評を書かせました。やはり、様々なこの展示の問題点が出てきました。学生たち、専門家ではないから的外れな指摘もありましたが。やはり展示を運営側の視点から、どんなふうに分析できるのかというコメントがあると、この満足度だけでは語り切れないような側面が、きっと見えてくると思います。だから、そういう複眼的なものを、今後やると、より良いと感じました。コレクションや展示というのは、やはり専門家の意見というのは、どの館でも定性的な意見を求めているところは多いので、そのようなものも併用すると良いのかなと思いました。

右代学芸主幹：アンケートについて補足いたします。アンケートでは、アウトカム的なこともコメントいただいておりまして、「アイヌ文化についてのさらなる勉強を進めたい」だとか、そういうコメントは得ております。ジオパーク（展）については、「こんなところにジオパークがあることを知ったので、改めてそこに行ってみよう」とか、「地質的なことがこんな身近にあることもわからなかった」とか、そういうアンケートの調査はあります。それと、今回の来館者の追跡調査を紀要に載せていますけれど、来館者の意見だけを聞いていても、いわゆるオーディエンスリサーチの本来的なものにはならない。本当は、予算をつけて本格的なオーディエンスリサーチをやらなければならない。逆に受け身的なオーディエンスリサーチで、来館者が満足してないということにはならないと思う。ほとんどの方がやはり満足して帰るという回答になっておりますが、基本的には来ていただいて、アウトカム・アウトプットから、いろいろな形で意見をいただいているというのがアンケートの調査でわかってきていることです。今後は、予算措置をしながら、博物館の外でも行えるオーディエンスリサーチの実施を検討していきたいというのが、大きな目標であります。

佐々木会長：ありがとうございます。

≪意見・提案４　ミュージアムパートナーについて≫

本田委員：先ほどお配りいただいた（事業期別道民参加型組織整備計画の）図ですが、先ほどからお話が出ているように、今からサークルを立ち上げて、学芸員の方が面倒を見るとなったときに、数値目標ももちろん大事だと思うのですが、次につなげていくための数字とし

て考えるのであれば、どういう質を持った、レベルを持った人が、一体どれぐらい集まったのかということが、次につなげるためには大事になってくると思います。計画の全体の最後まで行くうえでの、当面の数値目標を置き、しかもそれは「こういう目標に沿った人たちが、ここの時点でこれくらい育ってきている」というものとして考えていただけると、とても実行力のあるものになると思いました。

佐々木会長：ありがとうございます。今のは、このミュージアムパートナーに関する希望ということですね。

本田委員：そうです。

≪意見・提案５　事業全体のバランスについて≫

児島委員：全体の問題として、先ほど大原先生が仰ったことですけれども、理想はいろいろ出てきて、「なるほど、これができたらいいな」と、いつも思うわけですが、「これ、でも、実行するの大変」、「できるの？」ということを、最初の協議会の時に言ったと思います。先ほどの問題、このミュージアムパートナーのところですね。これだけではなくて、今回、（平成）29 年度の事業計画全体もそうですが、「ここは削る」ということが、細かいことでは出ていたと思います。たとえば目録は優先順位が低くて、それよりもインターネット上で見れるものは先にやるということは出ていたと思いますが、計画にある事業が本当にできるのでしょうかという心配があります。

≪質疑応答１５　開拓の村と内部評価との関わりについて≫

児島委員：前回（の協議会で）、開拓の村については私たちはどういうふうに関わるのかということを質問したのですが、お答えはいただけませんでした。資料 1 の最初のところに、「開拓の村の管理と運営については指定管理者」云々とあり、内部評価の対象外にしたと書いてあります。けれど、今日の報告で開拓の村のことが出て来て、結局、「やっぱり開拓の村の評価については、私たちもやるんだ」と勝手に納得していたのですが、それだったら、開拓の村に一体何人（お客様が）入っていて、どういうことが行われたかという説明が、必要なのではないでしょうか。

佐々木会長：開拓の村と、この内部評価のかかわりについて、もう一度確認してもらえますか？

児島委員：私たちが何をするかということが、問題になっているので、それを説明していただきたいです。

右代学芸主幹：開拓の村が昭和 58 年にオープンしましたが、建物の調査・移築あるいは内部展示については旧北海道開拓記念館が設立まで進めてきました。当初から財団法人が運営していますけれど、現在は指定管理者がその運営に関わっているわけです。ただし、建物は道の財産で、展示している資料も道の財産で、これは北海道博物館の財産になるわけですので、建物整備とか資料に関わるものについては、北海道博物館の業務に位置づけられるこ

とです。

佐々木会長：結論から言うと、博物館の内部評価委員会では、この資料１の１ページに書いてあるように、「関わらない」ということでいいのですね？　基本的に、開拓の村の運営については。

右代学芸主幹：運営には関わらないです。

佐々木会長：（運営の）中身については関わらないということですね。建物と資料については関わることはあれど。

右代学芸主幹：そういうことです。

児島委員：だから、その建物や資料に関わるので、それで北海道 150 年に向けての整備で予算を獲得できたから評価が高くなっているという説明ですけれど、では開拓の村には何人お客さんが入って、建物の価値についてどのように利用して、北海道博物館としてどのように建物を位置付けているのですか。屋根に穴が開いていて見せられない建物があるという話も聞いたので、どうなっているのかという説明が欲しいです。

佐々木会長：建物に関して予算措置ができたということは、大きな前進ですが、それによってどういうメリットが今後得られるか、それがどういうふうに村で活用されるかということは、私たちの評価委員会では、特にそこは関わらないということですね？

児島委員：関わらないのですね。

右代学芸主幹：資料１の１ページに開拓の村について書いてありますが、「なお、博物館の施設及び設備の維持管理、『開拓の村』及び『ふれあい交流館』の管理運営については指定管理者制度が導入されており、指定管理者に対する評価は知事が定める管理の目標に対する達成度を毎年度、把握、公表することで行っているため、北海道博物館が行う内部評価の対象外」ということであります。ですので、建物と資料、あるいは展示については、うちの責任の下でやってかなければならない。

佐々木会長：その２点だけは、こちらの評価の対象になるが、他は違います、ということですね。

右代学芸主幹：そうです。

≪意見・提案６　開拓の村に関する資料について≫

大原委員：評価の対象ではないかもしれませんが、開拓の村についての参考情報があるだけで、全体の流れと、私たちが何をどう評価しているかが見えると思います。

児島委員：そうです。参考情報として欲しいです。

大原委員：ですので、その入館者数だとか、指定管理者を知事がどう評価したのか、という報告をしていただけると、私たちは、何をやっているかがわかると思います。

宇佐美委員：しかも、指定管理者については、知事が把握するのですね？　そうしたら、その把握がどうだったのかも含めての資料が、参考資料として欲しいです。

佐々木会長：それに対しては口を出さないけど、読ませてほしいということですね。

大原委員：そうすると、建物を管理している意味もわかります。
佐々木会長：ありがとうございます。

≪質疑応答１６　「研究成果発信」について≫
児島委員：先ほど学会等での発表というお話が竹垣先生からありましたが、資料１の 49 ページの右側、「学会への発信」ですけれど、「研究グループないし北海道博物館としての研究成果発信のあり方や方法について検討を進める」とは、具体的にはどういうイメージがあるのですか？　紀要に書くなどではない研究成果の発信のあり方や方法とは、具体的にどういうことを考えていらっしゃるのですか？　たとえば、どういう方法がありうるのですか？
小川センター長：いわゆる研究論文の他に、展示に反映される、あるいは研究成果そのものを展示として実施するですとか、もうすでに予算は多少組んでいますが、公開研究会的な形で、より直接的に、例えばその研究課題を行った地域で成果報告会を行うとか、あるいは研究報告会と展示をあわせて開催するとかという形を含めて、論文ではないけれども、いろいろな形で伝える方法を考えたいということです。その場合、個人の論文ではなくて、館で組んだプロジェクトの成果報告を共同で行ったり、ある研究グループが中心となって、ある会を催したりという形になるので、そういったことを考えていきます。
佐々木会長：ありがとうございます。

≪質疑応答１７　ＪＲバスの英語表記案内について≫
児島委員：私は新札幌駅から勤め先の大学までバスで行きますが、その同じバス停に「開拓の村」行きのバスが発車します。それで、しょっちゅう、北海道博物館に行きたい外国人の方がバスの運転手さんに訊くのです、「これに乗っていいかどうか」と。博物館の職員さんは通勤のために、「開拓の村」行きのバスが発車するときにはいらっしゃいますが、そのバスが出ないときに――１時間に１本しかない時間帯もありますよね ――、博物館に行きたい人がいても、館の職員はいらっしゃらないですよね。私が大学に行くとき、必ずと言っていいくらい、そういう外国人がいます。私の同僚で、とても英語ができる人がいて、彼女がいつも「私、毎回英語で、答えてあげているのよ」と怒っています。そうしたら、数か月前に、バス停に、このくらいの大きさですが、英語の案内が出ました。でも、それが出てからも、同じ状況です。全然、その案内が役に立っていない。そして、この間、バスに乗って発車を待っていたら、英語のアナウンスが流れました。たぶん、「このバスに乗ればいいですよ」という内容が流れているのに、訊きに来る人がいます。少しずつ良くなっていると思うのですが、もう少しなんとかならないのでしょうか。あれは、JR 北海道バスが案内をしてくれているのか、それとも、博物館からお願いしていることなのでしょうか？　ということを訊きたいです。
北総務部長：お答えいたします。バス停の英語の表記については、昨年４月に、当館から要

請いたしまして、バス会社にお願いしたところ、快諾を得て、対応していただきました。それで、1時間に1本というご指摘ですが、増便については、バス事業者として難しい問題があるようです。私どものできる努力としては、とりあえず来館者数を増やす。増やすことによってバス利用者も増やす。どちらが先かという部分はありますが、そういう結果をもって、バス事業者に対して増便をお願いするということでしかないと思っております。なお、JR森林公園駅につきましても、当館で英語表記のみですけれども、わかりやすく案内を設置してございますので、ご利用の際はご覧になっていただきたいと思っております。

佐々木会長：ありがとうございます。

≪意見・提案７　道民参加型組織について≫

宇佐美委員：要望いいですか。道民参加型組織のことです。たとえばバス停のところで案内をするおじさんだとか、「古文書をびっしり読めるわけではないけれども、毎日博物館に行って、少し整理するようなことだったら自分はできるよ」という人たちはいっぱいいると思います。団塊の世代も含めて。だから、そういう人たちも、ゆるやかな形で、参加できるような組織もあってもいいのではないでしょうか。そういうことが、北海道博物館に来る人びとの裾野を広げると思っているので、この計画は計画でいいのですが、そういうことも考えてほしいと思ったので、要望です。

右代学芸主幹：その点は、私もいろいろ頭を悩ませているところですが、当館に博物館研究グループというのがありまして、そのグループでそういうゆるやかなところを、どのようにカバーしてくかを検討してもらおうと思っております。

宇佐美委員：よろしくお願いします。

≪意見・提案８　「ミュージアムエデュケーターの機能の強化」について≫

佐々木会長：２点だけ、意見を言わせていただきたいのですが、資料 1 の 34 ページです。「ミュージアムエデュケーターの機能の強化」の項目は、確か平成 27 年度計画にも出ていて、28 年度にもあまり実施できてないために B 評価で、さらにそれが 29 年度計画に出てくるのですが、29 年度の計画が非常にまだ曖昧模糊としています。なおかつ今年度はそういう実習・研修会への参加がゼロという状態では、何も手を下さなかったら、たぶんずっとこのまま、なし、なし、なし、で行くと思います。こういうことこそ、29 年度、もっと明確な、具体的な計画がないと、取り組めないと思いますし、やらないのなら、もう計画から削ってしまった方が、私はずっといいと思います。こういうところこそ、内部のガバナンスが発揮されるところではないかと思いました。

≪意見・提案９　「ICT ワーキングチーム」について≫

佐々木会長：それともうひとつ、資料 1 の 45 ページですけれども、項目別評価の平成 28 年度の実施状況で、「ICT ワーキングチームについては年度内に発足する予定である」とあ

りますが、年度内ということは 3 月ということ？　で、発足したのですね？　どんなメンバーで、誰がやってるのか、教えてもらいたいのですが。皆さん方の表情を見ていると、できてないことはわかるわけです。これ、3 月に議論して作った資料で、「これから今年度作ります」は、ないと思います。こういうチームがあって初めて推進できることだと思うので、やはりこういうのも、ガバナンスの欠如の最たるものだと思います。こういうところこそ、内部のガバナンスでチェックする。先ほどのミュージアムエデュケーターもそうですけれども、こういう実質的なところができていないと、どれだけ「内部ガバナンスやっています」と言っても、明らかにやってないことがわかるという実態だと思います。外部評価の時には、こういうところを、とことん突いてくると思うので、資料もそういうことに、きちんと答えられる、正確なものを作っておいたほうが良いのではないかというコメントです。以上です。

≪意見・提案１０　数値目標について≫

竹垣委員：先ほど、数値目標の話がありましたが、計画を全部見てみると結局、やる行為に対する数値目標がほとんどですね。でも、我々の欲しい数値目標は、結果としての数値目標です。たとえば私の会社でも広報部で数値目標を作っていますが、ひとつめは、たとえばリリースの発行枚数です。次の数値目標としては、ひとつめの目標であるリリースが新聞に掲載された比率を第 2 目標とするなどして、その第 1 目標と第 2 目標とで管理する。だから、そういう目標であってほしいし、もうひとつは、何度も言うように、本当に最後の最終形をどうもっていくかにつながるような数値目標であってほしいと思います。これはお願いです。

佐々木会長：ありがとうございます。

≪意見・提案１１　マスコミに対する広報について≫

宇佐美委員：広報で、もうひとつ、お願いがあります。投げ込みがほとんどですか？　レクチャーもしていますか？

舟山学芸部長：投げ込みが中心となっております。

宇佐美委員：ほとんど投げ込みばっかりでしょう？　だから、大変だと思いますが、「これは」という特別展か何かのときは、たとえば実物を 1 点、道政クラブに持って行って「これが目玉の展示会をやります」というレクチャーをぜひしてください。要するに記者発表です。それをすると、全然違うと思います。投げ込みは、資料をただボックスに入れるだけですから。レクチャーをすると、記者たちの興味の持ち方が全く違ってきます。そういうものが、効果的かと思いますので、ぜひそれもご検討ください。

佐々木会長：マスコミ側からの意見なので、効果的だと思います。ありがとうございます。

議題（３）　今後のスケジュールについて

佐々木会長：ただ今、様々なレベルのご指摘をいただきました。事務局で整理して、来年度

の事業運営に反映させるように、お願いしたいと思います。その他ですけれども、事務局の方からお願いいたします。

右代学芸主幹：資料 4 をご覧ください。平成 29 年度の計画ですが、4 月中には、今日いただいたご意見を含めて実績報告書を作成して送付したいと考えております。8 月に第 1 回の協議会を開催いたします。これは中間的な外部評価になりますので、平成 27 年度から 28 年度の事業の外部評価をお願いしたいと考えております。9 月にアイヌ民族文化研究センターの専門部会を開催します。3 月に平成 29 年度の内部評価の経過報告ということで、外部チェックを受けたいと思っております。平成 30 年・31 年については、おおむね資料のスケジュールのとおりで進めますが、開催日を含めてご相談しながら実施していきたいと考えております。以上です。

３　閉会

佐々木会長：ありがとうございます。ただ今の事務局からの説明につきまして、何かご質問ございますか？　よろしいですか？

　それでは、少し時間オーバーしましたけれども、これをもちまして本日の議事は終了したいと思います。皆様、ご苦労様でした。